［本書のアクセシビリティについて］
紙質が変わった冒頭ページ右下にあるQRコードを読み込むと、
8ページ分のテキストデータを参照いただけます。

TURN NOTE

TURNからひろがる言葉
2021

本書について

コロナ禍における事業対応が本格化してから2年目となる2021年度は、前年に開拓した方法で引き続き実施するプログラムから、実施が叶わなかった企画を再考して開催するなど、多岐にわたる活動を展開する1年となった。マインドシフトなるものを重ねてきた人たちの言葉を集約したのが、今年のTURN NOTEである。

本書のアクセシビリティとして、紙質が変わるページの節目にQRコードを設置し、読み上げアプリケーションなどを通して、音声で言葉に出会える仕様とした。ともにTURNの活動を行ってきた視覚障害者へのヒアリングを通して、「ページをめくりながら読む」楽しみを取り入れるとともに、視覚障害のある知人や友人に「手渡したくなる」本を目指した。

社会の過渡期において、他の人は何を感じ、何を考えているのか、直接的な接触のみならず、言葉を通して知ろうと模索した人も多いだろう。2015年からTURNがキーワードとして掲げていた「出会い」は、また異なる意味をもって2021年の私たちの前にある。

最後に本書には、TURNの活動の中で、日比野克彦によって綴られてきたテキストを収録している。数年間の節目で発せられたメッセージは、私たちに改めて何を問いかけてくるだろう。

本書は、「TURN」における以下の資料（2021年1月–9月）をもとに作成しています。

2021年9月30日現在の情報に基づきます。

文字起こしデータ

●TURNミーティング
TURNを共有し、意見交換する開かれた場。第13回と第14回はともにオンライン配信で開催。

●TURNラボ研究会
TURNラボで行っているリサーチやキーワードを議論する場。オンラインで実施。

●TURN LAND
TURNを日常的に実践する場を目指し、福祉施設や団体がアーティストとともに企画する参加型のプログラム。2021年はオンライン企画でも開催。

●TURNフェス6
8月17日–8月19日に東京都美術館にて開催。7月19日–9月5日にはオンラインプログラムを展開した。

成果物

●TURNジャーナル（TURN JOURNAL）
TURNの取組とその意義をさまざまな角度から発信する定期刊行物。

●TURN LANDアーカイブ
板橋区立小茂根福祉園による冊子『MAGAZINE こもね座特別号』。
クラフト工房 La Manoによる冊子『手のプロジェクト 2020年211日間の記録』

その他

●ドキュメンタリー映画『TURNs 2016-2021』を制作した田村大（らくだスタジオ）によるインタビュー
●TURNフェス6の参加アーティストによるステイトメント
●TURN関係者とのメールや会話を記録したメモ など

TURN NOTE

「こんにちは」が届くように

福祉施設に通うようになって痛感するのは、福祉施設の存在と地域やそこにいる人との間にある距離間です。
例えば、福祉施設の利用者さんと一緒に散歩に行った時、すれ違った人に彼が挨拶をした時に返事はありませんでした。そこにはこの社会の配慮もあるのかもしれないけれど、「こんにちは」という挨拶に返事がないという寂しさに対しての理由にはなりません。僕が出会えた利用者さんたちと一緒に、どうやったら社会と見つめ合えるのかを思いました。そこで、この「バンド工房」は始まりました。まるでライブ演奏をするバンドのように、表現を通じてコミュニケーションをしていくというものです。

永岡大輔（アーティスト）
TURNフェス6：東京都美術館《バンド工房》ステイトメントより
2021年8月17日

パラレルワールド

ろう者と聴者が生きている世界には、それぞれの集団の中に不文律があると思っています。またそれと同時に、人は個々の「ゆらぎ」を備えている。「ゆらぎ」とは規則性と不規則性の間に存在するもので、同じ時間を過ごしていても、それぞれの時間の感じ方が違うパラレルワールドなのかもしれません。

瀬戸口裕子（手話通訳士）
『TURN JOURNAL WINTER 2020 – ISSUE 06』より
2021年2月5日

どきどきワクワク

（TURNは）見たことのないものとか、やったことのないものを経験して、その人のもっている力を引き出してくれる存在。職員にとっても、他の業種や全く違う分野の人とやりとりするっていうのは、きっとTURNがなかったらなかなか経験できないかなって思ったので、職員にとっても大きな経験になったと思いますし、人と人とのふれあいを間近に見られる機会、どきどきワクワクをもらえる機会でした。

高田紀子（板橋区立小茂根福祉園職員）
田村大（らくだスタジオ）によるインタビューより
2021年6月25日

相手の表情が読みづらい

実は弱視の人も、相手の表情が読みづらいっていう状況に置かれてるんですよね。例えば、「そうだね」とかいうすごく短い言葉だと、それが笑って言っているのか、怒って言ってるのか、嫌がってるのかっていう、その表情がつかみにくくて、最終的には、「この人空気が読めないな」というような、人物評価を受けてしまうような話って結構耳にします。

三科聡子（宮城教育大学教育学部准教授）
第8回TURNラボ研究会より
2021年2月15日

アーティストとしてではなく

（桃三ふれあいの家に行く時）僕は全然、アーティストっていう立場では考えていないですね。いくつかの様態があると思うんですよ、人間ってね。そのいくつかの様態の中の一つとして、僕はアーティストということになっていますけれど、その側面で施設の人たちとコミュニケーションを取ろうとすると、僕は上手くお話ができなかった。なのでアーティストではない私として聞いてみたいこととか、話してみたいことがどんどん出てきて、きっかけを見つけては利用者に話を聞くという形で時間を過ごしていました。

伊勢克也（アーティスト／女子美術大学短期大学部教授）
TURNフェス6：オンラインプログラム
「MY TURN / YOUR TURN 02」より
2021年8月18日

そうやなと思っとく

おはようございます、上田假奈代です。帯を締めすぎて調子が悪いと思っていたけど、そうではなくて「こんなもの」が一緒にいると思ってる。
さっき小林君が「自分の小ささみたいなものをほぐしていきたい」と言ったけど、自分の痛みとか、なんかネガティブなことをどうこうするんじゃなくて、そのまま「そうやなと思っとく」という感じです。今日は「そうやねんけど、そうやな」と思って過ごします。

上田假奈代（詩人／NPO法人こえとことばとこころの部屋cocoroom代表／堺アーツカウンシル プログラムディレクター）
TURN LAND ハーモニー
「お金をとらない喫茶展3 〜in my brain〜」より
2021年2月27日

肉声を確かめてから物事に臨みたい

人は容易には変わらない。スマートに、フレキシブルに、てきぱき対応できることを良しとする世情にも辛いものがある。変化への順応性も一つの能力だが、愚鈍と言われても、ぐずぐずしていても、自他ともに潜在的にそこにあって、湧き上がってくる肉声を確かめてから物事に臨みたい。

永峰美佳（編集者／ライター）
『TURN JOURNAL SPRING 2021 – ISSUE 07』より
2021年3月19日

社会とつながる手段

一年目のTURNフェスで、本当に感動しました。自分たちが染めた藍染めの糸が、自分たちの予想していなかったものに変わっていく。普段の施設だと利用者の皆さんが商品をつくって、社会に出して売ったり、手に取ってもらったりっていうところでつながっていくんだけれど、それ以外にも社会とつながる手段って実はたくさんあるんだっていうのを感じさせていただいたTURNだったなと、振り返るとすごく思います。

高野賢二（クラフト工房 La Mano 施設長）
TURNフェス6：東京都美術館
トーク「手とその人 ~自分と社会を手でつなぐ32人のかたち~」より
2021年8月17日

言葉にできないものが、施設にうごめいている

言葉にできないものが、施設にうごめいているんですね。言葉で伝わる一方で、言葉に捉われてしまうと、いろいろと足元をすくわれてしまう。アーティストも施設職員の皆さんも、そして映像を撮っている僕自身も。インタビューの言葉だけに頼ってTURNを語ろうとすると痛い目をみるなと、初期の頃にTURNフェスの映像を初めて撮った時に思いました。

田村大（らくだスタジオ 映像演出家／脚本家）
TURNフェス6：オンラインプログラム「TURN Tunes vol.5」より
2021年8月4日

「ひきこもり」に対する先入観

出てこれないから「ひきこもり」、語れないから「ひきこもり」というふうな変な先入観があって。出てこれたり、語れたりする人は、「もうおまえは仲間じゃない」みたいになりやすいところがあるんです。
私の経験から言うと、当事者って役割を与えられると、結構おしゃべりになったりとか、非常に理路整然と経験を語る人が結構たくさんいる。そういう部分を見ないで、「ひきこもりって、ひたすらこもって誰にも心をひらかない」みたいな先入観や固定観念に押し込めてしまうのは、非常にまずいなと思います。

斎藤環（精神科医）
TURNフェス6：オンラインプログラム「対談：渡辺篤 × 斎藤環」より
2021年8月10日

自由に受け取って想像する余白

お花も音楽も抽象度の高い表現だからこそ、特定のメッセージを伝えることは難しく、同時に、自由に受け取って想像する余白が十分に残されているとも言えます。
受け取ったそれぞれが一度自分の内側へ飲み込んで何らかの解釈をすることになり、それは送ってくれた相手へ思いを馳せることでもあります。

実はこれは、とても「近い」距離で、贅沢なコミュニケーションの重ね方をしているのかもしれません。

井川丹（音楽家）
活動日誌メモより
2021年3月11日

正面玄関から人は入ってこない

自分が思っている正面玄関から人は入ってこないんだ、と思いました。いつも自分がここが玄関だって決めてるから振り回されていたのだと。挨拶をして始まる出会い方もあれば、名前で始まる出会い方もあれば、いきなり歩みよってきて、息つく間もない出会い方もまたある…ということに、気づきました。

大西健太郎（アーティスト／ダンサー）
田村大（らくだスタジオ）によるインタビューより
2021年6月23日

やってもいいんだ、失敗してもいいんだ

今までは、こういうことをやらなきゃいけないみたいな、ちまっとした感じだったんですけど、でもそんな面白いことをやっちゃおうか！みたいな。そういう気持ちに自分も少しずつなってきて。子供たちもなんかそういうことが楽しくなってきて、やってもいいんだ、失敗してもいいんだ、そういう気持ちがみんなに出てきたのはすごくよかったかなと思います。

近藤博子（気まぐれ八百屋だんだん店主）
TURNフェス6：オンラインプログラム
「MY TURN / YOUR TURN 01」より
2021年8月18日

寂しい絵に

コロナの状況で、まちなかに我々が頼りにしている情報そのものが減ってしまっているので、（頭の中で街を絵として描いた時に）絵自体も寂しい絵になってきてしまっている。

鳥居健人（ブラインドサッカーチーム「free bird mejirodai」／
参天製薬株式会社企画本部CSR室所属）
第13回TURNミーティングより
2021年3月6日

社会的な余白力

ぶつかることで問題が具現化されるところがあるんだけど、その時にしなやかさがないと、紛争になって解決しないんじゃないかな。文化とかアートの領域って、そこに柔らかなしなやかさをもち込める、社会的な余白力のある分野じゃないかな。

森 司（TURNプロジェクトディレクター）
第14回TURNミーティングより
2021年8月17日

持ち歩く荷物の選択

持ち歩く荷物の選択だけで、自分の立ち振る舞いや悩みが変わる。それによって見えてくる情景やその時の感情、直面する悩みに更新があるのは面白いと思った。

山本千愛（アーティスト）
TURNフェス6：オンラインプログラム《空白へとむかうみち［前編］》より
2021年4月20日

地中の種を想像する

クラフト工房ラマノから綿の種が届き「綿のある暮らし」がはじまった。芽が出るかどうか分からない地中の種を想像する時間は、「待つ」ことを楽しみに変えた。同じ日に植えても差ができた成長は、「違い」を個性に変えた。夜に葉を下ろし眠る姿には驚かされ、「あたりまえ」を発見に変えた。

五十嵐靖晃（アーティスト）
『手のプロジェクト 2020年211日間の記録』より
2021年3月24日

情報の一方通行

「アクセシビリティ」と聞いて、まずは私たち聞こえない人は、手話通訳、文字通訳などのなじみ深いイメージを思い浮かべます。ですが、それらはほとんどが「情報の一方通行」、つまり聞こえない人が情報の受け手というパターンというのが実情です。
「情報」というものは、受けるものも、発信するものもあるはずで、聞こえない人が積極的に情報を発信すること、また容易に発信できたり、効率的に伝わるようにする環境整備もまた「アクセシビリティ」ではないかと考えています。

小笠原新也（徳島県立近代美術館アートイベントサポーター／手話マップメンバー）
TURNフェス６の振り返りメールより
2021年８月26日

完璧さはそれぞれ異なる

全てを網羅して完璧にするということは難しく、またその完璧さはそれぞれ異なると思います。置かれている状況や一緒に活動する人たちと、どういう形だったらベストが尽くせるのか、どこまでを伝えていく形にするのかという議論やコミュニケーションを取ってみんなで考え、その中の一つを実践していくという積み重ねが、また次につながっていくのかなと思いました。

畑まりあ（アーツカウンシル東京職員）
第14回TURNミーティングより
2021年８月17日

福祉とアートは似ているか

TURNの活動を始めて一年目ぐらいの時に、「福祉とアートは似ているか」みたいな話をしたことがあって。その話をする前は、アートってかっこいいっていうだけで漠然としていて、似ているかなんて考えたこともなかったんですけれども、ちょっと考えてみたんですね。で、その時「似てるな」と思って。答えがないものというか、人と関わるというところが大きな共通点だと思うんですけれども、発見が多いじゃないですか。あといろんな視点をもてるんですよね。その人のもっているものが発見されたり。答えは出ないんだけれども、それについてすごく深く話し合ってみたり。そういうところが似ているな、と思ったのと「感度に触れる」って言うんですかね。心の感情の「感」のところに触れてくるものとして、似てるって思ったんですよね。

高田紀子（板橋区立小茂根福祉園職員）
田村大（らくだスタジオ）によるインタビューより
2021年6月25日

思考停止してしまわないように

創造力は生命力だと思います。何らかの緊急事態の時に、社会の既存の枠組みの中に幽閉され、思考停止してしまわないように、常に鍛えていたいもの。

八幡亜樹（アーティスト）
『TURN JOURNAL SPRING 2021 – ISSUE 07』より
2021年3月19日

物があるということが、とても大事

よくエコーロケーションという、自分で音を立てて、その反響音で一人で単独歩行しますよ、というような（視覚障害をもつ）方もいらっしゃいます。あと反響、反射というのを活用している方は多くて、例えばビルの谷間を歩いていても、自分の白杖の音の響きで横に建物があるんだとか、風の流れの変化で路地に入ったとかというのがわかるっていう人は少なくないですね。そうすると何か物があるということが、とても大事なことで、何もないだだっ広い野原とかの場所では、その空間をどのぐらい正確に把握できるのかなという難しさがあるかなと思いますね。

三科聡子（宮城教育大学教育学部准教授）
第8回TURNラボ研究会より
2021年2月15日

ゆっくり弱さを育てる

割り切れない世界をふわふわしながらも大きな言葉に流されないために、見えない世界を想像してみてください。そうやってゆっくり弱さを育てることで、「あたま」と「からだ」をつなぐための土壌となる「こころ」ができていくと思います。丁寧に養われた土壌をつくるには少し時間はかかるかもしれないけれど、きっとあなたにとって切実な創造力を生み出してくれると思います。

青木彬（インディペンデント・キュレーター）
『TURN JOURNAL SPRING 2021 – ISSUE 07』より
2021年3月19日

世界を自分に取り戻せ

世界を自分に取り戻せ

TDU・雫穿大学
松本力（アーティスト）
TURNフェス6：東京都美術館 映画上映ハンドアウトより
2021年8月18日

遠くの地面

なぜ私たちは地面にくっついているんだろう。片足ずつしか離せないし、ジャンプしたってすぐにくっついてしまう。私たちはそんな「近くの地面」を歩く。でも近すぎて無視することだってよくあるし、どこかへ向かうことで頭がいっぱいになって地面なんてよく見ていないかもしれない。

では「遠くの地面」だったらどうだろう、地面しかみえなくて周りのことは何もわからない「遠くの地面」を目にしたら、私たちはどんなふうにそこに立とうとして、どんなふうに歩こうとするんだろう。まずは遠くにいる人々から「遠くの地面」をもらうことにした。

岩田とも子（アーティスト）
TURNフェス6：東京都美術館《遠くの地面を歩く》ステイトメントより
2021年8月17日

成功することも失敗することもある

TURNは実験的な場。成功することも失敗することもある。でも失敗って駄目なことではなくて、やってみた結果は一つの情報になるわけだから、なぜ失敗したか、そこを改善するにはどうしたらよいか考えることにつながると思う。失敗って、とてもとても大事な情報だと思う。過去の難しかったことを取り上げることは、私たちの財産だと思うんです。

瀬戸口裕子（手話通訳士）
第14回TURNミーティングより
2021年8月17日

ゴムのような物差し

同じでいたいという気持ちと、違っていたいという気持ちを行ったり来たりしている。ゴムのような物差しを使っている気がするんだよね。

日比野克彦（TURN監修者）
第14回TURNミーティングより
2021年8月17日

水脈に浸かる

日本語と手話の場合は、どうしても一対一の対応にならない言葉がたくさんあるので、そういった時に、文脈を拾うとか編集していくって作業よりは、水脈に浸かるというか、水脈を受け取れた時にその水の流れや動きに乗っかった身体から表現が出てくるような気がするよね。

和田夏実（インタープリター）
TURNフェス6：オンラインプログラム「TURN Tunes vol. 4」より
2021年8月29日

自分で絵を描き込んでいく

プレーをする時には、ピッチを一つのキャンバスと例えて、そこに自分で絵を描き込んでいく。そこに描き込む絵っていうのは、フィールドの状況だったりとか、ボールの動きだったりとか、そういうものを描き込んでいって、自分の中で想像をしています。そういった部分でも、このブラインドサッカーとアートっていうのは、つながるのかなと思っています。

鳥居健人（ブラインドサッカーチーム「free bird mejirodai」／
参天製薬株式会社企画本部CSR室所属）
第13回TURNミーティングより
2021年3月6日

誰もが自分で理解を補っていく

通常の「情報保障」って、誰かが100%共有している情報を、どうやって障害をもった人に100%きちんと伝えるかみたいなところを目指しているんだと思うんですけど、多分、別にみんながみんなちゃんとわかっていなくてもよいという前提にすれば、コミュニケーションというのは、誰かが何かしらの形で情報を受け取っているんだけれども、誰も100%理解していなくて、誰もが自分で理解を補っていくことになる。それが主体的な理解とか解釈と言ってもいいと思うんですけど、そういう余地をわざと残しているようなところであれば、むしろよくわかんないところがあること自体が面白くなるんじゃないかな、と思いました。

梶谷真司（東京大学大学院総合文化研究科教授）
第9回TURNラボ研究会より
2021年3月22日

医療チームが社会に貢献しているのと同じレベルで

フェスとか交流とかっていう場所じゃなくて、もっともっと身近に手軽に誰もが始められるし、誰もがTURNなんて言葉は知らないけど、それらしきことをして、穏やかな、かつ経済至上主義的な豊かさではない豊かさを獲得していくプロセス。それを求めている人には提供できている状態を用意すること。それが、医療チームが医療チームとして社会に貢献しているのと同じレベルにおいて、文化事業に従事している我々のタスクとして捉えるべきじゃないか。

森 司（TURNプロジェクトディレクター）
田村大（らくだスタジオ）によるインタビューより
2021年6月4日

共感できないながらに想像する

他者と関わったり、支援やケアを行ったりする時に、共感に頼ってばかりでは駄目なんじゃないか。共感の必要性ってすごく語られると思うんですけれど。共感できない人こそが、共感されない人こそが孤立化する事情に気づいていく。共感できないながらに想像することは可能なのかっていうことを議論したりもしたんです。

渡辺篤（現代美術家）
TURNフェス6：オンラインプログラム「対談：渡辺篤×斎藤環」より
2021年8月10日

「ある」や「いる」がある

「きく」や「かたる」が起こる時に、「ある」や「いる」があるということは、当たり前のようでいて、結構ないがしろにされているんじゃないかと思います。
何かの音が鳴る時、当たり前だけどその鳴っているものや生き物がある、いる。
誰かが語り始める時、それを聞いている人がいる。
どこかで語りが起こる時、それが起こる場がある。

稲継美保（俳優）
TURNフェス6：オンラインプログラム「TURN Tunes」制作後記より
2021年9月5日

言えること自体が特権なんです

みんな違って、みんないいと受け止める多数派の人がいる。それを言えること自体が、実は特権なんですよね。

荻上チキ（評論家／ラジオパーソナリティ）
第14回TURNミーティングより
2021年8月17日

アートと福祉のあり方も変わってくる

Aだった世界が、新型コロナによってBになった。Bが終わった後は、AではなくA’になる。「A→B→A’」になることを見据えて、これからの活動を考えなければいけません。きっと福祉に求められることも変わってくるでしょうし、自ずとアートと福祉のあり方も変わってくるはずです。

宮田篤（美術家）
『MAGAZINE こもね座 特別号』より
2021年3月18日

想像範囲の輪郭が揺さぶられる

自分の想像範囲の輪郭が揺さぶられると、驚きとも喜びとも呼べないある種のショックから、わっと声を上げたり、全身が紅潮したりと、身体が反応し思わず相手に何かを伝えたくなります。思い返してみれば、これはエネルギーの循環でもあったのだと思います。

大西健太郎（アーティスト／ダンサー）
『MAGAZINE こもね座 特別号』より
2021年3月18日

イメージが形になっていく

自分のイメージが形になっていくうれしさと楽しさ、そして形になったものによって逆にイメージや当時の気持ちが救われるような感覚がありました。不思議で、あたたかい気持ちになる時間でした。

ながはたひろし（TDU・雫穿大学 メンバー）
TURNフェス6：オンラインプログラム
「世界を自分に取り戻せ」コメントより
2021年8月24日

著者プロフィール

青木彬（あおき・あきら）
インディペンデント・キュレーター ｜ アートプロジェクトやオルタナティヴ・スペースをつくる実践を通し、日常生活でアートの思考や作品がいかに創造的な場を生み出せるかを模索している。

五十嵐靖晃（いがらし・やすあき）
アーティスト ｜ 人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。TURNに初年度から参加。「クラフト工房La Mano」とともに、綿花を育て糸を紡ぐTURN LAND「手のプロジェクト」を行った。

井川丹（いかわ・あかし）
音楽家 ｜ 人の声のもつ質感にひかれ、その連なりや重なりによって浮かび上がる織り模様の探求をライフワークとしている。2019年からアプローズ南青山とフラワーアレンジメントと音楽を介した交流を行った。TURNフェス6に参加。

伊勢克也（いせ・かつや）
アーティスト／女子美術大学短期大学部教授 ｜ 自然／人工物／メディア空間などさまざまな環境で発生し存在するモノやイメージが形づくる形態をテーマに作品を制作。2017年からTURNに参加し、高齢者在宅サービスセンター「桃三ふれあいの家（2021年7月からは西荻ふれあいの家）」で交流を行った。

稲継美保（いなつぐ・みほ）
俳優 ｜ 東京藝術大学在学中より演劇を始め、舞台を中心にフリーランスの俳優として活動中。近年は映像作品のナレーションや、音声のみの演劇作品をつくるプロジェクトへの参加なども積極的に行う。TURNフェス6では、ラジオ番組「TURN Tunes」のパーソナリティ・構成を担った。

岩田とも子（いわた・ともこ）
アーティスト ｜ 身近な自然物の観察・採集から宇宙的なサイクルを体感するような制作をするアーティスト。2017年からTURNに参加し、2020年から多国籍の子供たちが通うインターナショナルな保育園「ハーモニー・プリスクール・インターナショナル」と交流を行った。

上田假奈代（うえだ・かなよ）
詩人／NPO法人こえとことばとこころの部屋cocoroom代表／堺アーツカウンシル プログラムディレクター ｜ 2003年にココルームを立ち上げ、「表現と自律と仕事と社会」をテーマに活動する。大阪釜ヶ崎を拠点に、「釜ヶ崎芸術大学」や「まちかど保健室」などをひらき、2016年からゲストハウスも運営している。

大西健太郎（おおにし・けんたろう）
アーティスト／ダンサー ｜ その場所・ひと・習慣の魅力と出会い「こころがおどる」ことを求めつづけるパフォーマー。TURNには初年度から参加。板橋区立小茂根福祉園との交流を通してTURN LAND「こもね座」などを展開した。

小笠原新也（おがさわら・しんや）
徳島県立近代美術館アートイベントサポーター／手話マップメンバー ｜ 会社勤務の傍ら、美術館や芸術祭などで、ファシリテーターとして活躍している。TURNフェス6では「アクセシビリティ・カウンター」の相談員として参加。

荻上チキ（おぎうえ・ちき）
評論家／ラジオパーソナリティ ｜ メディア論を中心に、政治経済、社会問題、文化現象まで幅広く論じる。NPO法人ストップいじめ！ナビ代表、一般社団法人社会調査支援機構チキラボ所長。

梶谷真司（かじたに・しんじ）
東京大学大学院総合文化研究科教授 ｜ 参加者がひとつのテーマで自由に語る「哲学対話」の実践者。学校教育、地域コミュニティなどで、フラットな関係性に重視しながら「共に考える場」をつくる活動を行っている。

近藤博子（こんどう・ひろこ）
気まぐれ八百屋だんだん店主 ｜ 東京都大田区に有機野菜や自然食品を扱う「気まぐれ八百屋だんだん」を営み、全国に先駆けて「こども食堂」を始める。TURN交流プログラムでの活動を通して、2017年度よりTURN LANDを展開した。

斎藤環（さいとう・たまき）
精神科医 ｜ 筑波大学医学専門学群 環境生態学卒業。医学博士。専門は思春期・青年期の精神病理、精神療法、および病跡学。TURNフェス6にトークゲストとして参加。

瀬戸口裕子（せとぐち・ゆうこ）
手話通訳士 ｜ 生活に密着した手話通訳から、美術館やアートプロジェクトの手話通訳まで担う。近年新たな取り組みとして、演劇の舞台手話通訳を行う。TURNフェスなどへの参加のほか、2020年度のTURNミーティングでは、アクセシビリティのコーディネートを担った。

高田紀子（たかだ・のりこ）
板橋区立小茂根福祉園職員 ｜ 生活介護サービスと就労継続支援B型サービスを行う通所施設「板橋区立小茂根福祉園」に勤める。板橋区立小茂根福祉園は、2015年よりTURNに参加し、2017年からTURN LANDをアーティストの大西健太郎と宮田篤と展開した。

高野賢二（たかの・けんじ）
クラフト工房 La Mano 施設長 ｜ 町田市にある築120年以上の民家で、障害のある人とともにものづくりに励んでいる。初年度よりTURNに参加し、アーティストの五十嵐靖晃と交流を重ね、2017年度からはTURN LANDを展開した。

田村大（たむら・ひろし）
らくだスタジオ映像演出家／脚本家 ｜ 映像制作会社「らくだスタジオ」を共同設立後、多様な映画制作に携わる。TURN初年度よりTURNの活動を撮影。TURNのドキュメンタリー映画を制作し、TURNフェス6で公開した。

TDU・雫穿大学
（てぃーでぃーゆー・てきせんだいがく）
その人自身の関心から学び、自分としての「生き方」「働き方」を模索できるオルタナティブ大学。TURN交流プログラムの一環として、アーティストの松本力とアニメーション制作を通じた交流を行った。

鳥居健人（とりい・けんと）
ブラインドサッカーチーム「free bird mejiro dai」／参天製薬株式会社企画本部CSR室所属 ｜ 2歳で網膜芽細胞腫により失明。15歳でブラインドサッカー日本代表として世界選手権に出場。参天製薬株式会社では、インクルージョン社会実現のため、失明や視覚障害に対する人々の認知・理解の向上などを行っている。

永岡大輔（ながおか・だいすけ）
アーティスト ｜ 記憶と身体との関係性を見つめ続けながら、創造の瞬間を捉える実験的なドローイングや、映像作品を制作し、近年では球体型の家を実現するプロジェクトを展開している。2016年からTURNに参加。2019年から「渋谷区障害者福祉センター はぁとぴあ原宿」と交流を行った。

ながはたひろし
TDU・雫穿大学 メンバー ｜ 松本力とアニメーション制作を通じた交流に参加した。

永峰美佳（ながみね・みか）
編集者／ライター ｜ 美術、工芸、デザインを中心に、幅広いジャンルの編集、執筆に従事。2020年度からTURN JOURNALの編集を担当。

松本力（まつもと・ちから）
アーティスト ｜ 絵かき、映像・アニメーション作家。TURNには2018年から参加し、シューレ大学や金町学園と交流する。2020年からTDU・雫穿大学とアニメーション制作を通じた活動を行った。

三科聡子（みしな・さとこ）
宮城教育大学教育学部准教授 ｜ 全国盲ろう者協会設立前より、通訳・介助員として活動。視覚特別支援学校で20年以上教員を務める。TURNラボでは、アドバイザーを務めた。

宮田篤（みやた・あつし）
美術家 ｜「おとなもこどももあそべるぶんがく『微分帖』」など、ワークショップやドローイングによって他者との関わりの中にある差異を見つめることを契機に作品を制作。2017年から板橋区立小茂根福祉園で、アーティストの大西健太郎とともにTURN LANDを展開した。

八幡亜樹（やはた・あき）
アーティスト ｜ 映像インスタレーションを「『人類の表現＝生きること』のための思考装置」と捉え、取材をベースとした作品制作を行っている。また、「辺境」に人類の表現の根源的なものを感じ、その追求のための場としてHENKYO.studio（京都）を設立。

山本千愛（やまもと・ちあき）
アーティスト ｜『12フィートの木材を持ってあるく』を2016年より実施。日本全国を木材を持って歩き、その過程をアーカイブし、作品を制作している。TURNフェス6に参加。

和田夏実（わだ・なつみ）
インタープリター ｜ ろう者の両親のもとで手話を第一言語として育ち、大学進学時にあらためて手で表現することの可能性に惹かれる。視覚身体言語の研究、さまざまな身体性の方々との協働から感覚がもつメディアの可能性について模索している。

渡辺篤（わたなべ・あつし）
現代美術家 ｜ 自身のひきこもりの経験を通して、さまざまな表現を発信している。TURNフェス6に参加。

日比野克彦（ひびの・かつひこ）
TURN監修者／アーティスト ｜ 東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授、岐阜県美術館館長、熊本市現代美術館館長、日本サッカー協会理事・社会貢献委員会委員長。2015年度、芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）受賞。

森 司（もり・つかさ）
TURNプロジェクトディレクター／アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長 ｜ ディレクターとしてNPOなどと協働したアートプロジェクトの企画運営や、人材育成・研究開発事業「Tokyo Art Research Lab」、「東京都による芸術文化を活用する被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo）」などを手がける。

畑まりあ（はた・まりあ）
アーツカウンシル東京職員 ｜ 地域住民と協働するアートプロジェクトや文化政策に関心をもち、2016年よりTURNに携わる。

TURNとは

SOCIALLY INCLUSIVE ART PRACTICE PROJECT

T U R N

障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトです。これまでに約80名のアーティスト、約60の施設や団体が参加しています。年間を通して展開している多彩なプログラムをもとに、国内外で広くその意義を発信しています。

監修：日比野克彦（アーティスト、東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授）｜プロジェクトディレクター：森 司（アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長）｜主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人Art's Embrace、国立大学法人東京芸術大学

TURN交流プログラム

アーティストと、福祉施設や社会的支援を必要とする人々が時間を重ねて交流し、共働活動するプログラム。また、社会や日常で意識化されていない課題への気づきを目的としたアーティストによるリサーチも行います。

TURN LAND

福祉施設や団体が、アーティストとともに参加型のプログラムを企画します。場所のもつ従来の機能に、市民が集まることができる地域にひらかれた文化施設としての役割が加わり、TURNを日常的に実践する場をつくります。

TURNフェス

TURN交流プログラムやTURN LANDを実施する多様なアーティストや交流先の活動が一堂に集まるフェスティバル。作品展示やワークショップ、トークイベント、オリジナルプログラムなどさまざまなコンテンツを通してTURNを体感する場を創出します。

TURNミーティング

TURNの可能性を共有し、語り、考えあう場。参加アーティストや交流先などの関係者とともに、各分野で活躍するスペシャルゲストを招き、さまざまな視点からTURNを考察します。

TURNラボ

アーティストや各方面の専門家から見出されたリサーチテーマをもとに、さまざまな知覚の世界観や、多様な人との共生の方法などについて議論と考察を重ねます。

TURNジャーナル

TURNにまつわる活動や人々から生まれた多様な観点や、表現、思考などを集め、そこから広がる豊かな世界を発信します。

海外展開

国内外の文化芸術機関などと連携し、海外でもTURNを実施。参加アーティストが各国で伝統的な技術や所作を携えて福祉施設やコミュニティなどと交流し、その経験をもとに展示やワークショップまたはパフォーマンスを展開します。

［これまでの展開：TURN in HAVANA／TURN in TUCUMAN, BIENALSURなど］

TURN 2021

3月　第13回TURNミーティング開催

聴覚と身体感覚に焦点を当て、ブラインドサッカー選手のゲストとともに実施。

4月　2021年度のTURNが始動

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に伴い、オンラインでの活動も継続して行う。

7月　「TURNフェス6：オンラインプログラム」開催

TURNフェス2021特設ウェブサイト上で、ワークショップや活動プロセスに触れる写真や映像などを公開し、さまざまな表現やアーティストと出会うプラットフォームを展開。

開催期間：7月19日–9月5日

「TURN茶会」開催

海外のTURNに参加したアーティストを中心に、国立新美術館で「地球・人をアートで問う」をテーマとした展示やワークショップを実施。

開催期間：7月23日–8月9日

8月　「TURNフェス6：東京都美術館」開催

展示や映画上映のほか、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に対応したアクセシビリティやサポーターに関わる企画も展開。

第14回TURNミーティング開催

「コミュニケーションの難しさ」をテーマに、オンライン配信のTURNミーティングに関わってきた手話通訳者や、さまざまな背景をもつゲストを招き、コミュニケーションの多様な形とその難しさについてトークを行った。

12月　第15回TURNミーティング開催

TURNの活動を振り返り、TURNから今後継承していくものやその意義について語り合った。

TURN NOTE
TURNからひろがる言葉 2021

令和4年2月10日

監修：森 司（アーツカウンシル東京 TURNプロジェクトディレクター）
編集：特定非営利活動法人Art's Embrace［田村悠貴、東濃匠十］、
アーツカウンシル東京［畑まりあ、長谷川知広］
編集協力：特定非営利活動法人Art's Embrace
［天羽絵莉子、岩中可南子、玉置真、東濃誠、村方光沙子、
山口麻里菜、ライラ・カセム］、アーツカウンシル東京［見﨑靖洋］
デザイン：Tanuki
翻訳：株式会社オフィス宮崎
印刷：株式会社山田写真製版所

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階
Tel：03-6256-8435／Fax：03-6256-8829
URL：www.artscouncil-tokyo.jp

TURN公式ウェブサイト：https://turn-project.com

©2022 Arts Council Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved

東京都　ARTS COUNCIL TOKYO　Art's Embrace　TOKYO GEIDAI

日比野克彦　ステイトメント

「おなじはない」がアートの原理
TURNはアートの原理を社会の構造に
しみ込ませていくための媒体
生きるということは、
自分ではない人たちと一緒に過ごしていくこと
自分以外はみな他者
少しでも分かり合いたいという気持ちが一瞬重なる
TURNがある場所を訪ねていく
区切らずみんながいる風景
アートの力は人間の社会の基盤
全ての人が生きていることを実感できる表現者になる
ものがアートじゃなくて、感じる人の力がアート
受け手がいるから表現者がなりたつ
TURNする意識・価値観・見方を獲得していく
人がはじめからもっている力を見つめなおす
TURNの時間
自分の奥深いところを見に行く行為のようなもの
社会におけるアートが発揮している力は、
今はまだ氷山の一角
TURNは旅である

TURNフェス　2016年

ここから先で、聞いたことは
一切誰にも…話してください。
ここから先で、見たものは
二度と思い出しては…いいです。
ここから先で、拾ったものは
小枝一つ、葉っぱ一枚、
持ち帰るべからず…ではありません。
ここから先で、起こっている出来ごとたちを
ここに来る前までのところで
起こしてはいけない…ではありません。

TURNフェス2　2017年

他者と自分の間

その間は、近くなったり、遠くなったりする。
近くなって嬉しいとき、遠くなって安心するとき
近くなって苦しいとき、遠くなって寂しいとき
私から他者へ近づいたり離れたり、
他者が私に近づいたり離れたり
他者が気になるとき、気にならないとき
他者を気にするとき、気にしないとき
他者から気にされるとき、気にされないとき
気になる曇り空な感じ、気にならない晴れた空な感じ
気にするというアクション、気にしないというアクション
気にされる嬉しさもあるし、気にされる辛さもある…。
他者と共有できる時間
自己と対話できる時間

他者と自分の間の関係は固定されているものではない
いつも自在にその間を行き来できる自分と他者、
行ったり来たりTURNできる間のあり方とは…。

TURNフェス3　2017年

日常非常日（ビッジョッビジョッビ）

経験とか知識とかが障害になることがあるとしたら、
それはどのようなことなのかを考えてみる。

私と他者が同じものに対峙しても
私の経験は他者の経験と同じにはならない。

私の日常はあなたの非日常。
あなたの日常は私の非日常。
それがいつも一緒にあるのが日常非常日。

TURNフェス4　2018年

地球上のあちらこちらにいるTURNで交流した人々は、
共感し合ってきている。
アーティストは、交流した人々が
それぞれに持っている振動を作品にしてきました。
この振動は、誰の中にもあるものだから、
それを形にすると、人と人が響き合ってきて、
何か「まあるい感じ」の大きな気配になっていく
ような気がするのです。

TURN on the EARTH ～わたしはちきゅうのこだま～　2020年

そうぞうをそうぞうする
おもいをおもう
かんがえることをかんがえる
わすれることをわすれる
ものがたりをつくるものがたり
おとぎばなしをするおとぎばなし

わたしはわたし
あなたはあなた

想像を思う
想いを創造する
考えることを忘れる
忘れることを考える
物語を作るお伽話
お伽話をする物語

私はあなた
あなたは私

TURNフェス2021　2021年